

# 広領域連携型基幹研究プロジェクト 「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」基本計画

令和4年4月1日  
人間文化研究機構

## 【プロジェクトの概要等】

### ① プロジェクトの概要

国文学研究資料館は、大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際研究ネットワーク構築計画」のもと、足かけ5年にわたり、古典籍の「書物」という面に焦点を絞り、書物と人との関わりを研究する「総合書物学」という異分野融合プロジェクトを推進してきた。当初の目標どおり、この成果は総研大における文化科学研究科共通科目「総合書物論」の開講に結実し、人文学の異文化融合研究の成果を大学院教育に還元するという新たな一步を踏み出した。ただし、「総合書物学」プロジェクトは、前例のない研究スタイルそのものをめぐって理論的な基盤を構築しながらスタートしたものであり、各機関が対象とする膨大な史資料群を前に予算・人力的制約もあり、研究内容そのものはまだ緒に就いたばかりであるともいえる。

そうした中、本プロジェクトは「総合書物学」のバージョンアップをはかるべく、2020年9月に文部科学省に策定された「データ駆動による課題解決型人文学の創成」（ロードマップ2020）の指針を見据え、新たなる時代のデジタルヒューマニティーズの成果などを適宜取り込みつつ、広領域連携研究の拡張を目指すと同時に、総研大における文化科学研究科共通科目「総合書物論」の展開に寄与し、学界ならびに社会への貢献を目指すものである。

具体的には3つの研究ユニットから形成され、そのいずれも日常では顧みられる機会の少ない古い時代の書物群を対象とし、《語彙レベルや文字組成といった何らかの単位に基づいて断片化》→《付加価値を有するデータとして再構築》という共通したフローを基盤としている。こうした共通化は、相互に情報や意見の交換を行うことを活発にするとともに、共同研究集会の開催を通して、フィードバックや新たな展開へのブレイクスルーを呼び込むことを企図したものである。

以上、本プロジェクトは各ユニットの成果を「総合書物論」という授業科目のもとに有機的に結びつけるといった異分野融合の観点に基づいており、「総合書物学」のさらなる拡張を実現させる役割を担うべく始動するものである。

### ② プロジェクトの統括、運営体制

全体のマネジメントは国文研が行い、随時、①全体研究会、②ユニット交流会、③成果公表検討会などを招集、開催する。

本研究は、書物という文化遺産に秘められた人類知を解き明かしていくことで得られる学術的な研究成果はもちろんのこと、そのプロセスにおけるトライ&エラーをも国内外の研究機関に発信し、議論の活性化に寄与する運営体制を敷いている。さらには公開研究会（オンライン含む）、国際シンポジウムの開催を通して、新たな教育や研究のあり方を模索している様々な場へ還元する。こうした活動は、単に「AI vs 人間」などというような二項対立的な図式に陥ることなく、これからの社会における人文知とテクノロジーの共存のあり方を示し得るといふ、メタ構造を有している点も特筆すべきであり、教育現場を入口に、一般社会に対し大きな波及効果があると考えられる。もちろん、各ユニットの研究対象や達成目標はある程度の自由さを担保し、それぞれの分野における研究が蓄

積してきた強みを活かしつつ、これからの人文学研究を刷新するユニークな発想に根ざしたものを優先したことはいうまでもない。

### ③ 研究テーマ・役割

・機関名：国文学研究資料館

・研究テーマの概要・目的：古活字版の組成・版面パターンの情報工学的解析

日本の印刷史の中でも際立った特異性を有する古活字版(\*)を対象とする。この分野は川瀬一馬による先駆的な研究以来多くの蓄積を有するが、本ユニットにおける研究では、最新のAIによるパターン学習の技術を用いることにより、活字の組み方(組成)と版面を情報工学的に解析しタイトルごとの精緻な書誌情報を集積する。この過程で、効率的なパターン認識方法やデジタルヒューマニティーズとの相関性の高い研究のあり方という、メタレベルでの議論も活性化するものと考えられ、これからの若い研究者に対しても、異分野の新たな技術を導入する呼び水になることが期待される。

・機関名：国立歴史民俗博物館

・研究テーマの概要・目的：国際的に共有可能な延喜式データの構築—人と機械がともに読める汎用的なデータ構築(本文・現代語訳・英訳)

これまでの総合書物学における『延喜式』研究はいまだ道半ばであり、本ユニットのプロジェクトによってさらなる拡充を目指す。

TEIを用いることにより、日本の古代典籍・写本の記述方法の汎用性を高め、TEIの応用を通してデジタル技術の活用を果たす。また、海外の日本古代史研究者の育成、英語によるデータベース公開により日本古代史研究の国際化を進めると同時に、校訂作業・デジタル化を通じて日本古代史・人文情報学・書誌学研究者を育成することにもつながる。

・機関名：国立国語研究所

・研究テーマの概要・目的：古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷

古辞書類ならびに他2つのユニットにおいて扱う書籍群を中心に、表記情報や形態論情報を加えながら、語彙資源の拡張を行う。これまでに開発された語彙資源には、現代日本語の語彙調査に基づく分類語彙表や、各種コーパスに基づく形態素解析辞書Unidicが知られているが、語彙調査やコーパスに出現しない語彙は収録対象とならず、特に、日本語語彙において重要な位置を占める歴史的な「漢語」の収集が手薄となることが問題であった。そこで、中世や近世の古辞書・語彙集、訓点資料、漢字音資料などの漢字資料に基づく漢語収集によって、従来の語彙調査やコーパスを補完し、語彙・表記・文字の史的研究を展開する。

### ④ 期待される学術的研究成果とその学術的・社会的意義

本プロジェクトは、古来継承されてきた人間の知恵の集積＝「書物」が持つ意味を、大きく2つの柱から明らかにする試みである。

書物に対し、内容を中心に情報として捉えようとすればするほど、それは自ずと記号の集合体へと還元されていく。本研究が目指す一つの柱は、その記号を単に断片とするのではなく、適宜構造化することにある。それには最新のデジタルヒューマニティーズがもたらした技術、たとえばTEIの

タグ付与などを用い、機械可読性という付加価値のあるテキストへと拡張していく必要がある。これが実現すれば、あるテキストが有する情報が、文学、歴史、民俗をはじめとする人文諸科学はもちろんのこと、理系の諸分野へも提供できる有機的なものとして構造化されることになる。それと同時に、分野横断的な問題を設定することにより、逆にテキストにどのような付加価値があればより汎用性の高いものになるか、という議論も活性化し、各分野相互に情報やスキルの交換が行われることが期待される。

もう一つの柱は、マテリアルという具体から読み取れる知の痕跡、集積に注目することにある。テキストのデジタル化を通してかえって露わになるのは、書物はまず第一にモノである、という点に尽きる。そこから得られる情報は、必ずしも後世に残そうとして残ったものではなく、何らかの合理性もしくは現代人が考える合理性を超越した当時の思想や嗜好に基づき、自ずと形作られたものが多い。たとえば、印刷技術や配列や視覚化における工夫、文字の選択、大きさ、数の配置などといったレイアウトに関することなどにも各時代の人々の思いや考えが反映されている。本研究では、こうした具体をとりまく個別の問いにアプローチする際の人間の認識の可能性を追究した上で、日々刻々と進歩するデータ駆動型のテクノロジーを大胆に導入することでその限界を突破することを目指したい。これはたとえば、国立情報学研究所と機構内諸機関という異分野同士が手を携えることで達成できる、新たな知のモデルケースとなることが期待され、各ユニットが構築しているウェブサイトやデータベースの機能拡張をも可能にすると考えられる。

## ⑤ 若手研究者育成への貢献

本プロジェクトのプロセスおよび成果は、総研大における文化科学研究科共通科目「総合書物論」の運営における安定性と持続可能性を高め、最新成果を授業内容に還元することにより、多様な分野を包括する総研大のフラッグシップ科目、モデル科目として位置づけられ、若手研究者育成の現場において極めて直接的な高い貢献度が約束される。

さらには、本プロジェクトから抽出される古代情報や語彙情報は極めて有用かつ応用可能な技術やスキルを有しており、それらを適宜公開することにより、幅広い分野における若手研究者による応用を促すものと思われる。

加えて、これまで未解明だった江戸時代以前の日本語の使用実態をAIの技術を活用して復元させることや、日本の印刷史におけるミッシングリンクである江戸時代初期の活字文化の実態を明らかにする過程で、日本文学・日本語学周辺はもちろん、人工知能研究周辺の研究者へのデータ提供という意味でも高い貢献度が期待できる。

さらにこうした研究成果を海外に発信することにより、アジア・ヨーロッパの言語や印刷との比較研究につながり、国外の若手研究者が、日本の文化様式の特異性やそこにある知られざる価値を再発見することにつながることを予測される。

## ⑥ 達成目標

- ・研究成果の総研大共通科目「総合書物論」への還元
- ・『延喜式』データベースの全巻完成、現代語訳・英訳
- ・日本語語彙資源の拡充
- ・古活字版の個体識別に資する書誌データ集積

- ・公開研究集会の年度毎開催
- ・シンポジウム（国際研究集会）の開催
- ・論文による成果公開

### ⑦ 6年間のロードマップ

※ 主要な研究成果の発信（国際会議、成果物等）を中心に記載

年度	取組内容
令和4年度	フォーラム開催（歴博）
令和5年度	シンポジウム開催（国文研・国語研）
令和6年度	大型Pシンポジウム報告（国文研）、シンポジウム開催（歴博）、フォーラム開催（国語研）
令和7年度	シンポジウム開催（歴博）
令和8年度	ブックレット作成（国文研）、フォーラム開催（国語研）
令和9年度	海外シンポジウム開催（国文研）、ミニ企画展（歴博）、シンポジウム開催（国語研）